

	<p>2014年 9月15日 第104号</p> <p>発行：いたばし水と緑の会 事務局</p> <p>年会費 2,000 円 郵便振替 00170-8-352508 いたばし水と緑の会 http://homepage3.nifty.com/mizutomidorinokai/ E-mail : mizumidori@nifty.com 〒174-0063 板橋区前野町 5-31-7 瀬田方 tel&fax3969-7124</p>
---	---

バッタ広場の生き物たち

前日までの猛暑が和らいでやれやれの8月23日。虫調査の日です。バッタ広場には虫たちがいっぱい。

毎年バッタ広場の木や草の丈を70cmほどに切り詰めています。この作業は植物が大いに茂る夏の直前に実施します。草地として維持するためと、犯罪の防止のため見通しをよくするためです（公園管理者の指示です）。今年は7月12日に切り詰め作業をしました。全体に丈を低く押さえ、そこにクズやガガイモなどの蔓植物が覆い、切り詰めたエノキもこんもり茂って、虫たちが喜びそうな草地になっています。夏の昆虫調査は、私たちの管理している草地がどういう状態か判定する意味もあります。

暑い夏は虫たちも元気で、私たちも暑さにめげず毎年この季節に虫の調査をします。その方法は、それぞれが昆虫網やポリ袋や素手で、虫を捕まえて一時保管し、1時間ほどしてからみんなですんなり生き物が何匹いたか確認してから、放します。虫を入れておくためにプラスチック容器を用意したのですが、開けたときに虫が逃げてしまい失敗。ポリ袋などで代用。新井さんは洗濯ネットに虫を入れこれがなかなか使い勝手がよさそうでした。

私の準備不足や段取りが悪くて、虫を逃がしてしまったり、記録忘れもあつたり（反省していますが）、それでもまとめてみると結構多く、生き物の賑わいを楽しみました。

バッタ広場にいたバッタ

バッタ広場には、オンブバッタ6匹、ショウリヨウバッタ3匹、トノサマバッタ1匹、ショウリヨウバッタモドキ1匹がいました。

オンブバッタ（写真右）：

メスの上にオスが乗っていることが多い。いろいろな植物を食べるので、草原ばかりでなく公園や花壇などにもいる。ハネがあるが飛ばない。止まるとき後ろ足を広げない。

ショウリヨウバッタ（写真次頁左）：

大型で細身のバッタ。主にイネ科植物を食べる。後ろ足を広げて止まる。

ショウリヨウバッタモドキ（写真右下）：



後ろ足を広げない。背中が茶色っぽい。



写真左：ショウリヨウバッタ 写真右：ショウリヨウバッタモドキ



写真左はバッタ広場の周囲のエノキを切っているところです（7月12日）。このようにして草はらの環境を維持しています。

下表の「バッタ自然度」によると、すんでいるバッタによって自然度を評価できます。バッタ広場は、面積は小さいですが、自然豊かな草原と考えられます。

伊丹さんから、バッタ広場の調査を公募して子ども達と一緒にやらどうかという提案がありました。来年はその方向で準備しましょう。

バッタ自然度（自然保護協会：「2006自然しらべ 夏休みに仮面ライダーを探せ」より）

0点	バッタはいない	バッタには魅力がないようです。バッタがくらせる環境づくりをみんなで工夫してみましょう
1点	オンブバッタがいる	かろうじてバッタがくらせる環境が残されています。ただしバッタには少し狭いようです。周りをつなげるイネ科植物を増やすなどの工夫をしてみましょう。
2点	ショウリヨウバッタ、トノサマバッタ、クルマバッタモドキもいる	バッタから見ると広さはOKです。ただし、草はらに手を入れすぎかもしれません。草はらの多様性を取り戻す工夫をしてみましょう。
3点	ショウリヨウバッタモドキクルマバッタもいる	バッタから見ると、なかなかいい環境です。この草はらの多様さを大切にしていきましょう。

私はバッタの区別がよくわかりませんでした。ショウリョウバッタは後ろ足が長いことと止まり方（足を広げて止まる）で、しっかり区別がつくようになりました。ショウリョウバッタは、オスは飛ぶときに「チキチキチ……」と音を出すので「チキチキバッタ」とも呼ばれ、私はキチキチバッタと呼んでいました。石橋さんは子どもの頃（千葉の茂原）、ショウリョウバッタの後ろ足をそろえて持つと頭を前後に振るので、ハタオリバッタと呼んで遊んだそうです。コメツキバッタも同じようにショウリョウバッタの別称です。ぺこぺこ頭を下げる人のことを「コメツキバッタのように」と言いますが、米を搗くような動作からくるバッタの名前が由来なのですね。身近な呼び方、バッタで遊んだ話、イナゴを食べた話も出て、昔話で盛り上がりました。

その他の昆虫

チョウは10種、蛾は5種以上、カマキリ2種、スズムシの仲間3種、甲虫6種、その他4種いました。昆虫が多いのでそれをエサにするナガコガネグモの巣がたくさんありました。また今年もタマムシがいました。城址ではタマムシをよく見かけます。空を飛んでいたり、バッタ広場で草に止まっていたりします。きらきらときれいなタマムシはやはり特別で、歓声があがります。

アカボシゴマダラは成虫が1匹、幼虫が2匹いました。アカボシゴマダラは、ゴマダラチョウによく似ていますが、後翅に赤い斑紋があつてきれいなので人気があります。今回ゴマダラチョウはいませんでした。

ゴマダラチョウもアカボシゴマダラも幼虫はエノキの葉を食べます。バッタ広場にはエノキの実生が多く育ち、バッタ広場の境界に生垣のように残しているエノキは幼虫や卵やサナギを観察するのに大変具合のよい場所です。ゴマダラチョウとアカボシゴマダラの調査をしているわけはありませんが、アカボシゴマダラが増えているような気がします。

アカボシゴマダラは要注意外来生物（外来生物法）

アカボシゴマダラは2006年には東京都内でも発生し、2010年以降、分布の拡大が続いています。関東を中心に拡散している個体群は、その外見上の特徴から、中国大陸産と推定され、自然の分布域から飛び離れていることや、突如出現したことなどから蝶マニアによる人為的な放蝶（ゲリラ放虫）の可能性が高いといわれており、要注意外来生物に指定されています。

環境省が外来生物法で要注意外来生物に指定している生物には、おなじみのミシシッピーアカミミガメやアメリカザリガニがあります。きれいなチョウですが、板橋の固有の生態系を乱す外来生物です。だから**要注意です**（坂本 郁子）。



写真左：アカボシゴマダラ、
写真右：アカボシゴマダラの幼虫

ホウセンカのこと

ホウセンカは花壇や鉢などに植えて観賞されるが、零れ種でよく繁殖するので道端で野生化しているのも見かける。5月号の会報で「植物の繁殖手段あれこれ」と題した拙文を報じたが、種子を弾き飛ばす手段で繁殖する植物として、その代表格とも言うべきホウセンカ（鳳仙花）を書き落としました。毎年庭で観賞していると言うのにです、なんたる不注意。そこで補足のためここに短い文を認めた次第。

ホウセンカはツリフネソウ科ツリフネソウ属の一年草（ある温度が保てると多年草にもなる）で、世界中に500種類も品種があるといわれる。花色は赤から白まで各種、一重と八重咲きがある。日本へは中国を經由して



入ってきたようで、最近では園芸種のインパチエンス（アフリカホウセンカなど）も栽培されているが、この仲間は病虫害に強く栽培は容易なので広く愛培されている。挿し木でも発根するので種子の出来難い品種や斑入り葉など貴重な種を保存したいときに、挿し木が行われるようだ。日中に水を切らせた鉢植えでは、軟質の茎は萎れて横倒しに



なってしまいが、水を与えるとシャンと立ち上がり簡単には枯れない生命力の強い植物だ。

一般にこの仲間は、半日陰や湿気を好む（特にインパチエンス）とされているが、あまり日当たりの良し悪しなど関係なく良く咲いてくれる。

ツリフネソウ科の花には多くの種に「けづめ」とか「距」と言われる突起があり、蜜を奥深くに蓄えて昆虫による受粉が確実にしているのだとか。また、花卉と距でバランスをとり花を水平に保って、昆虫が止まり易くしているようにも思えるが如何か。



林縁の湿地などで繁茂しているのを見かけることの多い、科・属を代表するツリフネソウは、夏の街中の暑さは苦手のように、拙宅の庭では満足に花を咲かせず数年を経ずに消え去る気難しい植物だ。

花が帆を下げた舟を連想させるところから吊舟草と名付けたそうで、学名や英語名は熟した種が一寸した衝撃で弾ける(のをこらえている一触即発)状態と想定し「忍耐や我慢をしきれない、いらいらしている・・・」と言う意味のインペシエンスが由来だという。和と洋で名付け方にも違いがあるので興味深い。因みに沖縄では鳳仙花をテンサグと言うそうだ。

かつてはホウセンカの花を揉んだ赤い液を指の爪に塗ったので爪紅(つまくれない)などの別名があるが、今でもそんな遊びが行われているのだろうか。(猪鼻昭二)

観察と活動の記録

7月19日(土) トンボ池の再生に向けての調査(講師:尾坂尚之さん)

池には荒川から採ってきた水草(ウキヤガラ)と猪鼻さんが植えたショウブ、アシカキが繁茂している。尾坂さんが、湧水の流入する棚田のような池にしてはどうかと提案され、さっそく最上位の小池(棚田1)を試作。水道水を入れるとすぐにシオカラトンボ♂がやってきた。そして土の中に潜んでいたらしい子持ちザリガニもすぐに池に入った(これは捕獲)。環境課は今年度工事で湧水水路の修理をする(予定では8、9月中)が、池については今後も修理等はしないと。やむなく専門家をお願いして湧水の流入状況を見ながら私たちが再生することにしたが、区は未だ工事を発注しておらず、いつになることやら。慥然とこのまま放置。



写真左:棚田1完成後 写真右:約1ヶ月後(8月16日)ザリガニ穴多数。翌週には干上がった。

7月26日(土) バッタ広場作業。

夏草の最盛期。ガガイモが繁茂。クズもまあまあ繁茂しているが刈らないで、アズマネザサ刈り取りと、ブタクサ、セイタカアワダチソウ、ヨウシュヤマゴボウなど外来種の抜き取り。猛暑で汗だく。年に1度は徹底草刈が必要かもしれない。

8月16日(土) トンボ池とバッタ広場の草刈

この日も猛暑で汗だく。トンボ池のなかの小池(棚田1)の水は少し減っているが維持している。ザリガニの巣穴多数あるが穴を手で探してもザリガニに届かない。

8月23日(土) バッタ広場生き物調査

バッタ広場に飛んできたバッタ・キリギリス

ショウリョウバッタモドキやツチイナゴは板橋区では荒川河川敷だけで見られたバッタ類である。私が見た範囲内であるが、赤塚公園付近では全く見られなかった。この2種は草丈が高めでやや安定した草原を好む種である。赤塚公園内の草原は草刈の回数が多く、この条件を満たしていなかった。バッタ広場が出来てから3~4年後に初めて見つかると、ショウリョウバッタモドキはその後毎年のように少ないながら見られる。ツチイナゴは毎年という訳にはいかなかったが、今まで数回は見ている。ショウリョウバッタモドキがバッタ広場に住み着いたのはほぼ確実、ツチイナゴも多分定着していると思われる。

キリギリス類のシブイロカヤキリモドキも数回見つかると、1回だけだが同時に数匹見つけた事がある。まだ定着しているとは言えないようだ。カンタンは数年前に鳴いているのを確認したが、残念ながら翌年は見つからなかった。シブイロカヤキリモドキとカンタンも草丈が高い草原を好む種である。

以上の4種は荒川河川敷には確実に住み着いており、毎年安定して見つかる種類である。板橋区内では荒川河川敷以外で私はこの4種を見ていない。ただカンタンは高島平付近で鳴いていたという話を聞いたことがある。バッタ広場で見つけたこの4種のうち、カンタン以外の3種は荒川河川敷から飛んで来たことはほぼ確実であろう。カンタンは光が丘公園や赤羽自然観察公園にも住み着いている。ただバッタ広場に一番近いのは荒川河川敷である。

ショウリョウバッタモドキもツチイナゴもバッタ広場にずっと住み続けることが出来るのだろうか。バッタ広場の面積は多分完全に永住するには狭すぎるような気がする。たとえ環境が好適に保たれていても、狭い面積に住む生物の個体数は限られている。生物の個体数は絶えず変動しており、個体数が少ないほど絶滅の確率は高くなる。

荒川河川敷の草原環境が保たれ、ショウリョウバッタモドキなどが荒川に何時までも住んでいられれば、バッタ広場で一旦絶滅してもまた飛んできてくれるであろう。丁度良い距離に荒川河川敷があることが重要なのである。いくら環境が良くても多摩川や利根川は遠すぎる。マッカサーとウィルソンが「島の生物地理学」で以上のことを数式を使い説明している。数学オンチの私にも結論は納得できる（本当に理解できているかどうかはこの際は不問）。

バッタ自然度表の注意点

バッタ自然度の表で気をつけなければならない点がある。ショウリョウバッタモドキは草丈が高めの安定した草原を好むが、トノサマバッタやクルマバッタモドキは裸地を好む傾向がある事である。板橋区付近にある裸地は耕作地か樹林や草原を工事で破壊した所である。板橋区では確かに自然度が低い場所である。しかし乾燥地帯の砂漠、高山の風衝地も裸地である。生物の種多様性は確かに低いが、裸地という特殊な環境に適応した特殊な生物が住む場所なのである。

トノサマバッタとクルマバッタモドキは似た環境を好むが両種の性質はかなり異なる。トノサマバッタは板橋区内で毎年見られるのは荒川河川敷だけだが、発生数の年次変動は大きい。発生数が多い年は区内各地で見られ市街地の真ん中でも見つかる。トノサマバッタは一気に飛ぶ距離が長く、空中高く飛ぶ性質がある。

一方クルマバッタモドキの飛行距離は短く、飛跡は低い。面積が狭い畑にも住み着き、追い掛け回しても遠くへは行こうとせず、元の畑にすぐ戻ってくる。10数年前には区内各地に見られた種だが、最近荒川河川敷以外では非常に少なくなってしまった。バッタ広場では滅多に見つか

らないが、城址地区の南側入口付近では多かった。狭い道路の向こうにある畑で発生しているのであろう。この畑地にも住宅が増えてしまった。このクルマバッタモドキはこの先どうなるのであろうか。私の標本箱には向原と若木で採集したクルマバッタモドキの標本がある。採集地の畑はもう無くなってしまった。クルマバッタモドキをここで再び見ることは多分ないであろう。

(釣巻岳人)

紀伊半島で見たシラスウナギ採り（ウナギのはなし 続きの続き）

ウナギの養殖はウナギの稚魚シラスを捕獲することから始まる。南の海で生まれたウナギは葉っぱのようなかたちで海を渡ってくる。河口に近づくと細長くて透明なシラスウナギに変身する。河口で捕ったシラスウナギを養殖池に放して育てるのがウナギ養殖である。卵から育てる完全養殖も成功しているが、採算が取れるまではまだまだ先が長いようだ。

30数年前の5月連休、紀伊半島南端に近い古座の町に泊まった。古臭い商人宿といった感じの旅館で、作家の司馬遼太郎氏も泊まったことがあるそうだ。夕飯も済ませ、ぼんやりと目の前の古座川を眺めていた。暗くなりかけた対岸の川岸に点々と明かりが灯る。橋を渡り対岸の明かりの正体を確かめに行った。

網を構え、アセチレン燈で水面を照らしている人がいる。網は捕虫網のように目が細かく、白い網、直径は捕虫網より小さい。何をしているのかと聞いてみると、シラスウナギを捕っているという。話をしている最中に網が水面を走る。私には何も見えなかったが、網の中には体長5~6cm、細くて透明な魚が入っている。暫くしてもう1匹捕ったがやはり私には見えなかった。

近所に住む人で漁業を生業としているのではないと言っていた。1匹50円ぐらいと聞いた記憶があるが確かではない。一晩で1000円ぐらい、楽しみながらの小遣い稼ぎだと言っていた。今思うと漁業権はどうだったのであろうか。

シラス採りの人が使っていたアセチレン燈は覚えていないが、水面を照らすためには右の形になる。左のものは縁日やお祭りの夜店で使っていた。1960年代まではこれが明りの主流だったと思

う。昆虫の灯火採集で使っていたのも左のタイプである。

カーバイトという灰色の石みtainなものを下段の容器に入れ、水を注ぐとブクブクと泡立つ、これがアセチレンガスである。ガスが出切るとカーバイトは白いカスとなる。上の二又になっているものが火口。この火口がまた熱で簡単に壊れてしまう。火口の交換とカーバイトの嫌な匂い、今となっては懐かしい夜間採集の思い出である。

(釣巻岳人)



活動のお知らせ

運営委員会：9月27日（土）、10月25日（土） 12:30～13:30

作業・観察会の後にラーメンしらかばで報告や活動内容などを相談します。

連絡先：坂本（090-4618-1295）

●会報の発送は奇数月。お手伝いできる方はよろしく

日時：11月15日（土） 12:30～

活動の問い合わせは事務局 瀬田（3969-7124）まで

活動予定いろいろ

1 赤塚ビオトープの観察と環境整備 いずれもトンボ池前集合。

9月27日（土）10:00～12:00 バッタ広場のササ刈り

10月25日（土）10:00～12:00 バッタ広場ササ刈り、外来種の抜き取り等

11月15日（土）未定

2 城址周辺の観察会（雨でも実施）

10月18日（土）10:00～12:00 トンボ池集合

いつもトンボ池かバッタ広場に直行しているので、城址の他のところや周辺（8丁目公園）を見て歩きます。みんなで見て考えたいところ、見てほしいところ、行ってみたいところなどを丁寧に観察してみましよう。

3 日暮台公園樹林地の観察プラスα

（樹林地内の推移と林縁植物を観察、様子を見て林縁の草取りなど）

10月8日（水）、11月1日（土）いずれも10:00～11:30 日暮台公園前集合

● ビオトープ管理のボランティア大歓迎

当会は、自然と共存するまちづくりをテーマに、生き物のすめる水辺（赤塚トンボ池）や草地（赤塚公園バッタ広場）などの管理作業をしています。活動の内容は、身近な動植物を観察しながら、大きくなった木を切ったり、セイタカアワダチソウなどの外来植物や生育旺盛なササを刈り取ったり等々です。一緒にやりませんか。

●会員になってくださると板橋の自然情報を中心とした会報「みずみどり」（隔月発行）お送りします（年会費2000円：振込先は表紙に記載）。